

保険薬局における CKD 患者への取り組み — 検査数値を継続的に利用した服薬指導 —

O-017

○大澤 満子¹⁾、埴 裕之¹⁾、花垣 美香¹⁾、政木 京子¹⁾、戸井 翔太¹⁾、長岡 友香¹⁾、佐藤 美紀¹⁾、森田 明子¹⁾、
豊田 幸子¹⁾、山口 貴子¹⁾、竹内 大悟²⁾

¹⁾薬樹薬局八千代、²⁾(一社) ソーシャルユニバーシティ

【目的】CKD（慢性腎臓病）の概念はわが国でも浸透しつつあり、各種ガイドラインも発表されている。しかし、現場でのCKDの認知度は決して高くはない。このような中、CKDについて啓発活動を行うことは、地域の薬局として当然の責務であり、医薬品の適正使用、及び副作用防止の観点からも重要である。今回、当薬局において、患者の血液検査値を利用して薬剤の適正使用を推進すると共に、数値を継続的に聞き取り、服薬指導に生かす取り組みを行ったので報告する。

【方法】当薬局で処方箋を応需した患者に対し、検査データの提示を求め、腎機能の低下が認められた患者を抽出した。患者には検査値の意味を十分に説明し、お薬手帳に検査値を継続的に記載しながら服薬指導を行った。なお、記入は患者の同意を得た上でを行い、記入様式は透析患者用、それ以外のCKD患者用の2パターンを作成して使用した。2014年4月～2015年3月までの取り組み内容をまとめ、検討した。

【結果】趣旨を理解し同意を得られた患者の内、現在まで継続利用している患者は、透析患者19名（平均年齢69.3±11.4歳）、その他CKD患者19名（平均年齢76.3±8.3歳）であった。得られた腎機能のデータを基に、薬剤の適正使用が疑われる例では、処方医に疑義照会を実施し、処方提案を行った。取組みを始めた2014年4月～2015年3月の間の腎機能に関する疑義照会は40件（継続患者以外も含む）あり、処方内容の変更等は25件（変更率62.5%）であった。

【考察】検査値の把握は患者の病態をより詳しく把握できることにつながり、疑義照会時に強い根拠を持つことができたと同時に、代替薬の提案なども含め、より説得力のある疑義照会につながったと考えられる。つまり、薬剤師による検査数値の把握は、薬剤の適正使用を推進していくうえで重要であると思われる。今後も、積極的に検査値を聞き取り、継続的に患者をサポートしていくことは非常に有効であると思われる。